

第三回講義 (20141017)

第1章 問答の観点からの言語行為論

§1 発語内行為の分類

§2 質問の発語内行為の特殊性

§3 言語行為はなぜ成立するのか？

参考文献：・入江幸男「メタコミュニケーションのパラドクス(2)」、『大阪樟蔭女子大学論集』第31号、pp.143-160、1994年

・Paul Grice, *Studies in the Way of Words*, Harvard U. P., 1989.

・ポール・グライス『論理と会話』清塚邦彦訳、勁草書房、1989年。

言語行為とは、発話行為、命題行為、発語内行為、発語媒介行為である。

発話行為は、その他の言語行為がなくても、それだけで行われることが可能である(発音練習や字を書く練習など)。ある音が語になるのは、語が命題行為や発語内行為に使用されるからであって、起源の上では、命題行為や発語内行為に先行して、成立するのではない。

これに対して、命題行為と発語内行為は常に結合してのみ可能である。「Hi!」「こんにちは」のような挨拶のとき、「Hei!」「あー!」のような呼びかけのとき、命題行為を行っていない。しかし、発語内行為は行っているのかもしれない。それともこれらは、発語媒介行為だけを行っているのだろうか?)

発語媒介行為は、命題行為と発語内行為が行われても、行われないことがある。が行われるとは限らない。これは起源の上で、命題行為と発語内行為に依存している。

従って私たちは「言語行為がなぜ成立するのか」という問いを、まず「命題行為と発語内行為はなぜ成立するのか」という問いとして問う必要がある。サールは、この間に答えようとするときグライスの意味論を援用している。まずはそれを紹介し、次にそれを検討することにしたい。

1 グライスの意味論

グライスは、有名な論文「意味」(1948)において、まず、最初に「自然的意味」と「非自然的意味」を区別する。前者の例は、「それらの斑点は、風疹を意味している」「最近の予算案は、我々が厳しい年を迎えること、を意味している。」であり、後者の例は、「バスのベルが3度鳴るのは、バスが満員であることを意味している」である。前者では、意味するものと意味されるもの間に因果関係がある、つまり因果性にもとづいた意味である。風疹の例では、斑点(意味するもの)が風疹(意味されるもの)の結果であり、予算案の例では、予算案(意味するもの)が厳しい年(意味されるもの)の原因となっている。「AがBを意味する」とは、「AはBの原因である」あるいは「AはBの結果である」のどちらかに言い換えられる。

これに対して、後者の意味は因果性に基いていない。

————— (以下は、拙論「メタコミュニケーションのパラドクス(2)」の一部を引用)

グライスの論文の主題は、後者の「非自然的意味」が成立するための必要十分条件を明らかにすることである。グライスによる最初の提案は、次の通りである(以下、第三の最終提案まで順次検討する)。

”xが何かを非自然的に意味した”が真であるのは、xが、xの発話者によって、ある”聞き手”に

ある信念を生じさせるように意図されていたときである」¹

(この引用からも、グライスが、*x*の非自然的意味を、発話者の立場でとらえようとしていることが解るが、それは次に述べる第二、第三の提案で、さらに明確になる。後の論文「発話者の意味と意図」では、このような観点での意味を、「発話者の意味」と呼び、そのことを明示しているのだが、この論文では、その点が曖昧で、そのために議論が曖昧になっているところがあるように思われる。)

この第一提案の欠点をしめすために、グライスは次の例を挙げている。私が、B氏が殺人者であるという信念を刑事に生じさせるために、B氏のハンカチを殺人現場の近くに残す場合に、我々は、私が、そのハンカチを残すことによって、B氏が殺人者であることを意味した、とは言わないだろう、とグライスは言う。

(グライスはこれを自明と考えたのか、なにも説明していないが)我々は次のように説明できるだろう。刑事がそのハンカチを見て、B氏が殺人者だと考えたとする、そのときそのハンカチは、刑事にとって、B氏が殺人者であることを「自然的に」意味しているといえるが、「非自然的に」意味しているのではない。さらに、この場合の私は、刑事にとって、そのハンカチが「B氏が殺人者である」ことを「自然的に」意味することを、意図している。それゆえに、私は、その行為によって、何かを「非自然的に」意味しているとは言えない。

このようなケースを除外するために、グライスの考えた第二の提案は、次の通りである。

「*x*が何かを非自然的に意味したというためには、*x*がある信念を生じさせるという意図をもって”発話”されるだけでなく、発話者が発話の背後の意図を、”聞き手”が認知することを意図したのであればならない。」²

ここでは次の二条件が提案されている。

条件1「発話者が、聞き手にある信念を生じさせようと意図して発話する。」

条件2「発話者が、発話者が聞き手にある信念を生じさせようと意図していることを、聞き手が認知することを意図する。」

上のハンカチの例で「非自然的意味」が成立しないのは、条件1は充たされているが、条件2が充たされていないからである。その例では、条件2と矛盾する条件2!が充たされている。

条件2!「発話者が、発話者が聞き手にある信念を生じさせようと意図していることを、聞き手が認知しないように意図する。」

ところで、相手を欺こうとする上のような例を除外するには、条件2!が成立しないこと、つまり次の条件で十分なのではないか。

条件2#「発話者が、発話者が聞き手にある信念を生じさせようと意図していることを、聞き手が認知しないことを意図していない」

我々はグライスの条件2の指摘をすばらしい卓見だと思うが、しかしそれは、それだけグライスの条件2が我々にとって意外な指摘だったということである。つまり、ふつう我々は条件1のみを意識し、条件2をほとんど意識していないのではないかと思われる。条件2は本当に必要なのだろうか。

条件1と条件2#を充たしている発話者が、聞き手に「あなたは私にある信念を生じさせようと意図しているのですか」と質問されるばあい、「はい、そうです」と答えるだろう。なぜなら、彼は条件1「発話者が、聞き手にある信念を生じさせようと意図する」を充たしているからである。そして、「はい」と答えることは、彼が聞き手にある信念を生じさせようと意図していることを認知させることになる。つまり条件2を実現することになる。

1 Paul Grice, *Meaning* (1948), in *Studies in the Way of Words*, 1989, Harvard U.P., p.217.

2 Ibid.

もう一つの可能性がある。そして、実際には、これが最も多いかもしれない。それは、次の条件が満たされる場合である。

条件2##「発話者が、発話者が聞き手にある信念を生じさせようと意図していることを、聞き手が認知することも、しないことも意図していない」

この場合にも、条件2#の場合と同じで、「あなたは私にある信念を生じさせようと意図しているのですか」と質問されたならば、「はい」と答えるだろう。そして、その返答によって、条件2を実現することになるだろう。

しかし、条件1と条件2!を充たしている発話者、つまり相手を騙そうとしている発話者の場合には、同じ質問をされても、「いいえ」と答えて、シラを切ろうとするだろう。彼は、ある信念を聞き手に生じさせようと意図していることを聞き手が認知しないことを意図しているからである。

まとめておこう。発話者は、もし、条件1を充たしており、また騙そうとしてないのならば、顕在的ないし潜在的に条件2を充たしている（潜在的に条件2を充たしているというのは、条件2#や条件2##である）。したがって、我々は、グライスのいう条件2が、少なくとも潜在的に充たされることが必要であると言えるだろう。グライスが条件2を必要と考えるのも、おそらくこのような意味においてであろうと思われる。

条件2の必要性は、聞き手の側から考察するときには、もっと明らかである。我々が、相手のある行為を発話として理解するのは、彼がその行為によって何らかの信念を生じさせようと意図していることを我々が認知する場合であり、かつその場合に限る。相手の行為の意図をそのように認知しないにも関わらず、相手の行為を発話として理解することはありえないだろうからである。それゆえに、もし発話者が条件2を（はっきりと自覚して）充たしていなくても、聞き手が、ある行為を、発話として理解するとすれば、聞き手は、発話者がその発話によってある信念を生じさせようと意図していることを認知しているはずである。言い換えると、そのとき、聞き手は、発話者に関して条件2が成立していると考えているはずである。＜聞き手Aにとって、Sが、行為xによって、何かを非自然的に意味する＞ための条件は、グライスの2つの条件であることは明らかである。ただし、＜話し手Sにとって、Sが、行為xによって、何かを非自然的に意味する＞ための条件（グライスがこの論文で考察しようとしているのは、おそらくこの条件であると思われる）もまた、上に見たようにグライスの2つの条件（ただし条件2は潜在的充足でよい）であるといえる。

さてグライスはこの第二の提案にもまだ欠点があることを、次の例で示す。ヘロデは、洗礼者ヨハネの頭をお盆に載せてサロメにプレゼントした。この場合、ヘロデは、ヨハネが死んだことをサロメに信じさせようと意図しており、かつ、そのように意図していることをサロメに認知させようと、意図している。しかし、この場合、ヘロデが、洗礼者ヨハネの頭をお盆に載せてサロメにプレゼントすることによって、ヨハネが死んだことを意味していた、とはグライスは考えない。

なぜだろうか。サロメは、ヨハネが死んだことをサロメに信じさせようとヘロデが意図しているのを認知するだろう。しかし、サロメが、ヨハネが死んだことを信じるのは、目の前のお盆の上の首がヨハネの死を「自然的に」意味しているからである。グライスは、この例は、「何かを思わせること」ではあっても「何かを告げること」ではない、という。そして、「非自然的意味」とは「何かを告げること」なのだという。³

この区別を示すために、グライスは、次の二つのケースを比較せよと言う。

(1) 私は、X氏に、X夫人との不謹慎な親しさを示しているY氏の写真を見せる。

(2) 私は、そのような振舞のY氏の絵を描いて、それをX氏に見せる。

(1)の場合には、私が彼に彼の妻とY氏の関係を信じさせようとしているという私の意図をX氏が認知しなくても、X氏は妻とY氏の関係を信じることもある。たとえば、私がその写真を彼の部屋に忘れて置けば

3 Ibid., p.218.

あいである。つまり、私は、X氏に彼の妻とY氏の関係を信じさせようと意図1していることを、X氏に認知させようと意図2しなくても、意図1を実現することができる。つまり、ここでは、二つの意図が独立している。意図2から独立に意図1が成立するのは、その写真が、X氏の妻とY氏の関係を「自然的に」意味しているからである。もちろん、この場合には、最初のハンカチの例のように、聞き手が意図1を認知することが、意図1の実現を無効にすることにはならない。

(2) の場合には、私が彼に彼の妻とY氏の関係を信じさせようとしているという私の意図1をX氏が認知しなくても、X氏は妻とY氏の関係を信じる可能性があるだろう。たとえば、私とその絵を彼の部屋に忘れて置けばあい、(問題が微妙になるので、それが私の描いたものであることをX氏が理解しないと) X氏は、その絵をみて妻とY氏の関係を信じる可能性があるだろう。確かに、あるかもしれないが、その場合には、その絵が写真のように、自然的意味をもつことによってではなく、誰かが、その絵で、誰かに(あるいはX氏に)、妻とY氏の関係を伝えようと意図1したのだと考えるからである。この場合にも、私ではないが、誰かの意図1をX氏が認知するときのみ、絵はX氏に妻とY氏の関係を信じさせることができるのである。私がX氏の前で絵を描いて見せる場合にも、私の絵がX氏に妻とY氏の親しい関係を信じさせることになるのは、私がX氏にそのことを信じさせようと意図1していることを彼が認知することによってである。つまり、二つの意図(意図1と意図2)は独立しておらず、意図1の実現は意図2の実現に依存している。

そこで、グライスが最終的に提案するのは、次の規定である。

「” A氏が、xによって何かを非自然的に意味した” ということは、” A氏が、ある信念を生じさせるという意図の認知を介して、その信念を生じさせるという意図をもって、xを発話した” ということとおおよそ等値である。」⁴

さらに、発話には、ある信念を生じさせるものだけでなく、聞き手にある行為をさせるものもあるので、グライスとストローソンにならって、より一般的に、「聞き手にある反応rを生じさせる」と言い替えて、整理すると次のようになる。

< S (speaker) が、行為 x によって、何かを非自然的に意味する > ための条件は、次の3つである。

条件1、Sが、行為 x によって、A (addressee) にある反応 r を生じさせようと意図1している。

条件2、Sは、AがSの意図1を認知することを意図2する。

条件3、Sは、Aによる意図1の認知にもとづいて、Aにある反応 r が生じることを意図3する。

第二節 ストローソンによるグライス批判

ストローソンは、グライスの3つの条件を充たしているが、それだけでは、Sが何かを非自然的に意味しているとは言えないような反例を示す。⁵

住宅販売人Sは、顧客Aが買おうと思っている家がネズミに荒らされていることをAに信じさせようとしている。Sは、Aを家のなかにつれて行き、自分がわざと放った大きなネズミを見せることによって、Aにこの信念を生じさせようと、決めた。しかも、Sは、Sがネズミを放つのをAが見ていることを知っており、かつ、Aに見られていることにSが気づいていないとAが思っていること、を知っている。

ここでSが意図しているのは、Aが次のように考えることである。「こっそりネズミを放す行為によって、Sは、<私(A)が家に到着し、ネズミを見て、ネズミを本当に住んでいるものとみなし、そこから、その家はネズミに荒らされていると推論すること>を意図しているのだろう。しかし、Sには、その家がネズミ

4 Ibid., p.219.

5 P. F. Strawson, Intention and Convention in Speech Acts, in Philosophical Review, vol.73, 1964, pp.439-460.

に荒らされていると私が信じるように企む理由がない(むしろ、それは彼の利益に反することだ)。きっと、その家は本当にネズミに荒らされており、Sはそのことを私に信じさせようと意図しているのだ。その家は、ネズミに荒らされているのだ。」

ここで上のグライスの3条件は、次のように充たされている。

- 1、Sが、ネズミを放つ行為によって、「その家がネズミに荒らされている」ことをAに信じさせようと意図1している。
- 2、Sは、(ネズミを放つ行為をAが見ることによって)AがSの意図1を認知することを意図2する。
- 3、Sは、Aによる意図1の認知が、Aの信念pの理由ないし理由の一部として、機能することを、意図3する。

しかし、ストローソンによれば、これはグライスが説明しようとしているコミュニケーションのケースではない。SはAに何かを気づかせようとしているが、知らせようとしているとは言えない、とストローソンはいう。(特にこれについての説明はないが) 次のように考えれば明らかだろう。

もし、Aは、Sがネズミを放つ行為から、「この家はネズミに荒らされている」ということを理解するのであるから、Aにとっては、その行為は、「この家はネズミに荒らされている」を「非自然的に」意味しているのである。しかし、Aは、<Aがネズミを見てそこから「この家はネズミに荒らされている」という「自然的意味」を引き出すこと>をSが意図している、と理解しているのであるから、AはSから「非自然的意味」をもつメッセージを受け取ったとは考えていない。したがって、SがAに何かを知らせようとしているとは言えない。

そこで、このような事例を排除するために、ストローソンは、グライスの3つの条件に次の条件を加えることを提案する。

- 条件4、Sは、Aに反応rが生じるようにSが意図1していることをAが認知することをSが意図2していることをAが認知することを意図4する。

第三節 シファアの相互知識

じつはストローソンは、この条件4をつけ加えてもまだ不十分で、さらにメタレベルの意図の認知の意図を条件としてつけ加えなければならないような場合があるかも知れないと述べている。シファアは、それを受けて、条件5「Sが、Aが意図3を認知すること、を意図5する」を加えなければならないような事例を示して見せる。⁶

原理的にはどんなに意図の認知の意図の認知の意図の・・・という繰り返しの条件をつけ加えても、不十分なケースが有り得るので、シファアは、このような意図の系列の反復とは別の仕方で、このようなケースを排除しようとする。そこに登場するのが、「相互知識」(mutual knowledge)である。

シファアは、まず「相互知識*」を次のように定義する。⁷

「K*SAp」=df. 「SとAが、pを相互に知っている*」
とすると、次のように言うことが出来る。

6 S.R. Schiffer, *Meaning*, Clarendon Press, Oxford, 1972, pp.17-26.

7 Ibid., pp.30-31. シファアは、"mutual knowledge*" "know* mutually" など常に know に * をつけ加えて、大変注意深く普通の know との異質性に注意している。しかし一般的には(シファアの「相互知識*」についての論じる場合を含めて)単に「相互知識」(mutual know)という表記が通用しているので、この論文ではそれに準じることにする。

$K^*S A p \text{ iff}$
 $K S p \quad [S \text{ が } p \text{ を知っている}]$
 $K A p$
 $K S K A p$
 $K A K S p$
 $K S K A K S p$
 $K A K S K A p$
 $K S K A K S K A p$
 $K A K S K A K S p$
 \cdot
 \cdot

シファーは、これを用いてグライスの分析を次のように修正する。グライスの3条件をもう一度あげて説明しよう。

条件1、Sが、行為xによって、Aにある反応rを生じさせようと意図1している。

条件2、Sは、AがSの意図1を認知することを意図2する。

条件3、Sは、Aによる意図1の認知にもとづいて、Aにある反応rが生じることを意図3する。

もしここで意図1が相互知識になれば、Aは意図1を認知するのだから、意図2が実現することになり、条件2は不要になる。さらに、ストローソンの挙げた条件4「Sは、Aにpを考えるようにSが意図1していることをAが認知することをSが意図2していることをAが認知することを意図4する」の意図4も実現する。また意図4の認知の意図も実現する。以下同様。また、もしここで意図3が相互知識になれば、シファーの挙げた条件5での意図5も実現するし、意図5の認知の意図も実現する。以下同様。従って、グライスの条件1と3が相互知識になれば、意図の認知の意図の・・・という条件の無限系列は、不必要になる。そこで、シファーは、グライスの条件1と3と、それらが相互知識になることを意図するという条件を、提案するのである。従って、こうなる。

<Sが、xの発話によって、何かを非自然的に意味する>のは、次の3条件充たされる場合である。

- (1) Sが、Aの中に反応rを生み出すことを意図する。
- (2) Sが、意図をAが認知することを介して、意図を実現することを意図する。
- (3) Sが、(1)と(2)が相互知識になることを意図する。

ただし、シファーは、相互知識が成立するための条件を、彼なりに非常に厳密に検討する結果、最終的な提案は、これよりもかなり複雑なものになる。

論文からの引用ここまで

2 グライスの意味論への批判

グライスの意味論に対しては3つの反例の指摘がある。(Cf. Jeff Speaks, 'theory of meaning' in Stanford Encyclopedia of Philosophy)

反例1：聞き手がすでにpを信じていることを知っているにもかかわらず、話し手がある発話によってpを意味する場合がある。例えば、思い出させる場合、告白する場合。

反例2：話し手の意図の認知によってではなく、議論の結論として、pを信じさせようとしている場合。(これは、J. サールが指摘している批判である。)

反例3：思考における言語の使用のように、意図された聞き手がない場合。

意図2と意図3は implicit な意図であり、そのように意図していますか、と問われたら「はい」と答えるようなものである。